文教大学国際学部における英語教育改善にむけて

English Education Reform at Bunkyo Faculty of International Studies.

小　林　ひろみ

Hiromi Kobayashi

教育改善を進めるには、学生、教師、環境という密接に絡み合った三つの要素の考察が必要である。さらに、これらは時代の動きによって変化することも念頭に入れておかねばならない。しかしながら、理想論だけではどうにもならない教室数、クラス・サイズやカリキュラム等のさまざまな制約のある中で、あらゆる条件が整うまで改善に手をつけるのを待つわけにはいかない。できるところから順次始めよう、というのが1994年の春に国際学部の英語教師となるにあたっての私の基本的な考え方であった。これは今も変わっていない。

[カリキュラム改正]

1994年度は、1995年度実施を目指した新カリキュラム作成の最終段階に入っており、英語科目の設定についてカリキュラム委員会から意見徴集があった。そこで私は、英語のコマ数を増やすことは他科目との関係上望むべくもないが、言語習得には集中訓練が効果的なので、現状のように必修英語８科目を３年間にふり分けて薄く引き伸ばすのではなく、聞く・話す・読む・書くの４技能に焦点を当てた基礎訓練を４科目ずつ２年間に行い、３年次からは時事英語などの専門科目に移行することが望ましいと述べた。しかしカリキュラム委員会は、専門科目の早期導入と第２外国語充実の観点から、外国語科目としての英語を必修７科目に削減し、新たに第２外国語Ⅲを設け、英語１科目と合わせて選択必修と決定した。

新旧英語カリキュラム比較表

学年	旧カリ 1990～1994年度 必修　８科目	希望案 必修　８科目	新カリ 1995年度～ 必修７科目＋選択１科目
１年	３科目 講読、ＬＬ、会話	４科目 講読、ＬＬ、会話、作文	３科目 講読、ＬＬ、会話
２年	２科目 講読、会話	４科目 講読、会話、作文、 資格対策コース	３科目 講読、会話、作文
３年	３科目 講読、会話、作文		１科目　作文 ＋ 選択必修　１科目 資格対策コース

必修外国語10科目20単位の総数設定を変更せずに第２外国語の充実を図るのであれば、１年・１科目・週１回授業ではなく、１年・２科目・週２回授業とし、必修選択１科目を２年次に回すこともできたはずである。

語学カリキュラム代案

学年	英語 必修７科目＋選択１科目	その他の外国語 必修２科目＋選択１科目	計 20単位
１年次	必修　４科目	必修　２科目	12単位
２年次	必修　３科目		８単位
	選択必修　１科目		

この案は、全カリキュラム構成に大きく影響を与えずに外国語教育に効果的な集中訓練を実施するため、外国語教育を２年間で終了して専門科目へ移行することをねらったものである。専門教育の迅速な導入の重要性はむろん考慮すべきだが、現行制度の大学の１・２年次は、旧制度では高校にあたるレベルである。受験勉強の弊害も考慮して、この時点では基礎教育ないし remedial 教育に力を注ぐ方がむしろ効率的ではないだろうか。

新カリキュラムの最終案については語学教育委員会に再度の意見徴集がなかったため、この代案をカリキュラム委員会に提出することはできなかった。いずれにせよ、英語とそれ以外の外国語との比重の関係や、それ以外の外国語として何語を教えるのかについても、理念論・観念論だけからではなく、学生のニーズや実施可能性を考慮した新たな語学カリキュラムの構築が国際学部の今後の重要な課題のひとつとなると思われる。

語学新カリキュラムの骨格は以上の通りであるが、1994年度は旧カリキュラム下の入学者の最終年度であり、私自身も国際学部の状況把握ができていない状態であった。そこで従来の方式にしたがった英語の授業を実施しながら、どのような改善が必要か、また実施可能かを探った。

[クラス設定]

１．クラスの固定化→変動化

まず気づいたのは、英語のクラス分け方式の矛盾点であった。新入生（280～300名前後）は、オリエンテーション時にプレースメント・テストを受け、その結果によって14クラスに分けられていた。学生番号順に機械的にクラス分けをしている大学が多いにもかかわらず、国際学部ではこのような方式が取られていたことは、前任者の努力と熱意の現れであった。しかし英語のスタッフ不足（当時２名、現在４名）のため、それ以後の学年ではプレースメント・テストの再実施ができず、１年次のクラス分けがそのまま３年間連続して持ち上がっていく結果になっていた。単に英語指導上の技術的効果の観点からばかりではなく、学生の気分を一新させて気持ちを引き締める教育的配慮の観点からも、毎年クラスを再編成することが望ましい。しかし、少数の英語教員だけでこれを実施するのは無理であることも事実であった。そこで考えられるのは３つの方策である。

① 外注方式

経費の問題とともに、国際学部の新入生のクラス分けは他科目の受講にも影響するため数日で処理しなければならず、外部の機関では事務的に間に合わない。

② 入試結果の利用

適切なクラス分けにはリスニング能力の測定が欠かせないが、リスニング・テストの公平な実施には学内放送設備の充実が必要なため、入試では実施されておらず、今後も受験者数の多い一般入試では実施のめどが立たない。(97年からの受験者数の少ないＢ日程入試のみに導入。)

プレースメント・テストを２・３年生にも実施するとなると、その他の方式の併用が必要になる。

③　英語の成績の利用

上級生については、成績を数値化して利用する可能性もないではない。しかし、文教大学で使用されているコンピュータ機器は一定方式ではないため、互換が難しく、時間と人手がかかる。また、教師の評価には差がある。

しかし、最大の決めてはプレースメント・テストの位置付けである。国際学部における英語教育全体を考える場合、学生の能力と進歩を標準化して測定し、客観的な比較をする尺度が必要である。莫大な手間と直接・間接の費用がかかるプレースメント・テストを単にクラス分けのみに利用するのではなく、これを英語教育改善全般に利用すべきである。複数方式の併用では一律性がなく、また入試英語の難易度は年々一定ではないので、能力変化の測定ができない。そこで、一定レベルのプレースメント・テストを学内で作成・実施する決定を行った。

なお94年度までは、プレースメント・テストのコンピュータ処理は、教育システム室の協力により行われていたが、教育システム室の方針が変更され、これは中止となった。そこで新カリキュラムでは電算室の協力をお願いすることになった。本年度は英語の新カリキュラムの完成年度にあたり、３学年分のコンピュータ処理が必要だったが、国際学部の英語教育改善のコアはまさにこの基礎データにあるといっても過言ではなく、協力をいただいている電算室と教務課のスタッフの方々には心から感謝したい。

２．テスト結果の部分的利用→全面的利用

旧カリキュラム下においては、完全な能力別クラス編成ではなく、プレースメント・テストの結果を部分的に利用していた。すなわち、学生は学籍番号によってまず７つのグループに分けられ、それをプレースメント・テストの結果で上下２つに分けて14グループとしていたのである。これは、能力別方式にありがちな２つの欠点を修正するための措置であったと思われる。

①　下のクラスに入れられた学生は学習意欲の低下を起こす傾向がある。さらに、多くの学生は偏差値万能主義に傷ついて入学してきているため、テスト結果によるクラス分けを人間の価値判断ととらえる者もある。

②　初心者に接する経験の少ない大学の英語教師は、下のクラスを教えることを不得意とする者が少なくない。かくいう私も例外ではないが、そのため、このようなクラスを効果的に教えることができなかったり、極端な場合はあきらめてしまうケースすらゼロとは言えない。

旧カリ下のクラス分け方式は、この点を踏まえたものであったが、国際学部においては現実に即さない面も現れていた。確かに、学年全体の能力のばらつきがそれほど大きくない場合は、この方式でも同一クラス内に指導に困難を来すほどの差は現れない。しかし、学年全体の上下の差が大きい場合、上級クラスについてはさほど影響は出ないが、下のクラスでは能力の開きが大きくなる傾向がある。

それに加えて、国際学部では例年10名前後入学してくる留学生の英語教育も考慮しなくてはならない。留学生には日本語を第１外国語とした別個の外国語カリキュラムが組まれ、英語は第２外国語扱いになっている。しかし、出身国によって英語能力が大きく異なり、日常的に英語を使っている者がある一方、本年度の例にみられるようなＡＢＣも教わっていない者もある。語学教育の面だけから考えれば、留学生の母語やレベルを配慮した留学生用英語クラスを設定すること

が望ましいが、それは一般クラスの削減につながり、日本人学生にしわ寄せが行くことになる。そのうえ留学生を別クラスにすることは、日本人学生との交流の機会を減らすことになる。そこで、留学生にも同じプレースメント・テストを実施して日本人学生と同じクラスに入れているのが現状である。

このような条件のなかで、②にあげた教師自身の指導技術の弱点を是正しながら、能力差の大きいクラスを調整していくことは実際問題として非常に難しい。このため、特に下のクラスにおいて、遅れた者の指導に焦点を合わせれば上位の者の訓練が大幅に遅れ、上位の者に焦点を合わせれば下位の者は無視されるという状態が引き起こされていた。

さらに、導入が検討されていた一般入試の得意科目申告制度とB日程の英語検定有資格者受け入れ制度により、国際学部における英語能力の両極化がさらに進むことが予想され、これに対する適切な対応が要求されることも明らかであった。目標は高く持つべきではあるが、高すぎては到達不可能になり、学習意欲をそぐことにつながってしまう。もちろん、低く過ぎてもやる気をなくすのは同じである。これを避けるには、プレースメント・テストの結果を徹底的に利用して学生の英語能力を正確に把握し、個々のレベルにあった達成可能な目標の設定が必要であった。

そこで、95年に導入された新しいクラス分けでは、プレースメント・テストの結果を全面的に利用し、能力に応じた3つの目標レベルを設定した。すなわち、上位の者についてはこれをさらに引き上げて、海外留学の英語能力の目安となるTOEFLスコア500～550点到達（英語検定準1級程度）を最終目標とさせる。不得意とする者については進歩に重点をおき、英語検定準2級パスを最終目標とさせる。そして、学年の大多数を占める中位の者の目標としては、英語検定2級パスを狙わせるというものである。

①にあげた学生の心理的問題については、外国語教育としての英語教育はあくまでも技術指導で、能力別クラス分けはそのための便宜的手段であり、学生の人格を判断するものではないことを学生に理解させることが必要である。これが解決されないと、学生はさらに傷つき、極端な場合は英語学習を拒否することもありえる。そのためクラスのレベルは学生に公表しておらず、方式も毎年変更している。幸い、スポーツ訓練と同じで、レベルの異なる者に同一訓練を施すのは合理的ではないと指摘することで、理解は得られているようである。

3．再履修クラスの設定

先に述べたように、旧カリ下の英語クラスは1学年14クラスで、原則20名の少人数制度ということになっていた。しかしながら、平均して毎年1割以上ある再履修者は、各クラスに分散して配属され、これにより実質クラス・サイズは23～25名となっていた。ところが新カリ設定にあたって、この数を原則25名12クラスに削減したいとの申し入れがあった。25名であっても、他大学の実情をみれば良い方ではあった。しかし、少人数制度とは20名以下を指し、また語学教育の成果を上げるには15名以下が望ましいことは研究者が一様に指摘するところである。特に会話や作文の指導では、15名を越えると薄く広くの授業にならざるを得ず、成果があがらなくなる。目に見える効果を上げることが学生を集めるための絶対条件のひとつである一般の英会話学校や海外の英語研修では、この条件を厳しく守っているのに、大学では実施されていないのは皮肉なことである。さらに、多くの他大学が語学教育改善のためにクラス・サイズの縮小化の方向に進んでいる現在、残念ながらこれは逆行であった。

だが、旧カリにおける再履修者の配置には大きな問題があった。この方式は、再履修者をなる

べく目立たないようにするために取られた処置であったが、実際は学籍番号などから他の学生にすぐわかり、この意図は活かされいなかった。さらに病気等の特別なケースを除いて、一般に学習意欲の低い再履修者は個別の指導等の細かいケアが必要となるが、ミックス・クラスでは担当教師は他の学生の指導に忙しくなかなかその余裕がなく、また他学生に対する彼らの影響も好ましいものばかりではなかった。

このため、再履修者はむしろ別クラスに入れ、かれらのレベルに即した指導をする方がよりよい結果が望めると思われた。さらに、教師自身の授業法の改善のためにも、このようなクラスを指導することがよい経験になる。そこで代案として、一般クラス12、再履修クラス１（ただし、再履修者が非常に多い場合は２クラス）の設定を提案し、これが受け入れられた。さらに、再履修クラスの担当は来校日数が少ない非常勤講師ではなく、原則として個別指導のしやすい立場にある専任教師があたることとした。スケジュールの都合上これが不可能な場合もあるが、非常勤講師の方々も快く協力してくださっており、再履修者の問題把握が容易な別クラスの設定は基本的に成功であったと思われる。

[プレースメント・テスト]

1．プレースメント・テストの改定

プレースメント・テストは、国際学部の英語教育改善の基礎データとなるものだが、旧カリではリスニング・テストのみが実施されていた。それは、従来の日本の英語教育が、英文和訳を中心とした読解重視型なっていたため、その中でリスニングが良い者は一般に語学能力が高く読解も良い、という傾向があったからである。だがこの方法では、読解が良いにもかかわらずリスニングが弱いために下のクラスに入れられた者は、リスニングが改善されても、クラスの変更がないまま３年間低いクラスに留め置かれ、指導上の問題が起きていた。

逆に、帰国子女等にまま見られるケースだが、読解能力が弱くてもリスニング能力が良ければ上級クラスに入れられ、本人も英語ができると思いこんでいるために進歩しにくいという問題も現れていた。特に、国際学部の英語プログラム構成では、１年次にＬＬとネイティヴ・スピーカーによる会話があるため、リスニングは短期にかなり改善されると推測され、このギャップの問題の解決が必要と思われた。この推測の妥当性については、新プレースメント・テストの結果が証明しており、これについては後述する。

さらに、1989年の文部省指導要領の改定により、コミュニケーション重視型の英語教育の方針が打ち出され、その影響が遠からず現れることは必定であった。場合によっては、リスニング能力は改善されるが読解能力はむしろ低下する可能性も予想され、プレースメント・テストに読解問題を導入し、学生の能力を両面から判定することが国際学部の英語教育改善に急務と思われた。また、それまで国際学部で使用されていたリスニング・テストは一部の大学でのみ実施されているものであったため、学生の英語レベルを標準化して客観的に測ることが容易でなかった。そこで、４技能の判定にも利用でき、国際的データも豊富で信頼性がある客観テストとしてTOEFLを考慮したが、３つの理由からこれは断念した。

① 英語能力の優れている者を上級に進級させる免除システムの導入には、文部省認定のある英語検定試験の方が便利である。

② TOEFLはスコアが400点以上でなければデータとしてあまり信頼性がないといわれている。日本人の平均スコアは480～90点であるが、国際学部の学生の平均は400点に達しない可能性が

強いと予想される。

③　TOEFL 試験はアメリカの大学教育向けに作られているため、日本人学生には語彙的にも内容的にも必ずしも適切ではない面がある。

ビジネス英語の能力測定に日本の企業で人気のある TOEIC についても、アメリカのビジネス経験のない日本の学生には不向きであり、現時点で実施されているのは日本と韓国だけなので、これも除外した。

そこで、日本国内だけという限界はあるものの、比較データが豊富で、国際学部全体の目標となっている英語検定２級試験をターゲットとし、実際の試験より問題数と受験時間を減らした模擬試験をプレースメント・テストとして導入することに決定した。また、国際学部における英語教育の有効性を判定するため、これを統一試験として１～３年生に実施し、学年比較も合わせて行うこととした。したがって、96年については２学年にまたがって、97年については３学年にまたがって同一テストが実施された。旧カリのプレースメント・テストでは同一のリスニング試験が連続５回使用されたが、毎年対象が変わったため問題がなく、新入生の年度別比較が明確に出た。しかし新カリでは、同一学生に同じ試験を連続使用することになり、数値の信頼性に問題が出る可能性があるので毎年変更している。しかし、その難易度は一定とみなすことができる。

以下は、1995年度より３年連続して実施した結果である。なお、TOEFL スコアと英検の相関性については調査が少なく、現在一般的に利用されている換算表は参考にすぎない。

２．プレースメント・テストの成果

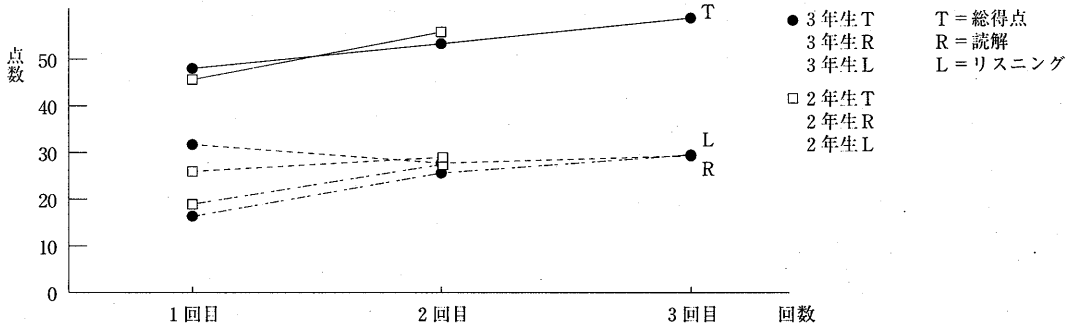
①平均値の推移

プレースメント・テスト学年別平均点

	リスニング（40点）			読　解（60点）			総得点（100点）		
	１回	２回	３回	１回	２回	３回	１回	２回	３回
95年度入学者（３年生）	16.3	25.6	29.5	31.7	27.7	29.3	48.0	53.3	58.8
96年度入学者（２年生）	19.4	27.6		26.1	28.6		45.5	56.2	
97年度入学者（１年生）	24.6			26.2			50.8		

１回目：入学時　　２回目：１年終了時　　３回目：２年終了時

３学年の入学時の平均成績を比較すると、リスニング能力は毎年伸びており、特に高校のコミュニケーション重視の英語教育を完全に受けてきていると思われる97年度入学者と、そうでない95年度入学者の間には大きな差が見られる。読解については逆に下がっており、今後、英語能力の改善には読解読練が鍵になる可能性が強いことを示唆している。国際学部ではすでに読解能力



改善を意識した授業体制に入っているが、それは昨年のプレースメント・テストの結果を受けたものであった。

すなわち、現３年生の２年次の成績（96年実施）を見ると、リスニングが大幅に改善されて総合点が上がっているが、読解が下がっている。日本人学生の共通の特徴として、大学受験後は勉強以外のことにエネルギーを注ぐ傾向があり、そのため読解能力に大きく影響する英語の記憶単語数は入学を境に減ると言われている。２年次のプレースメント・テストの結果は、この一般論の妥当性を裏づける傾向を示しているといえた。

さらに、すでに述べたように国際学部の１年次の英語のプログラムでは、リスニング訓練につながる科目が会話とＬＬの２科目あるのに対し、読解は１科目しかない。旧カリではＬＬの授業の半分がスピード・リーディングに当てられていたため、１年次の読解とリスニング訓練の総合的な時間配分が実質的に半々となっていた。これは、学生が90分連続してリスニングに集中するのが難しいために取られていた処置である。これにより読解力の低下が防げたのか、あるいは伸ばすことができていたのかについては、残念ながらデータがないため不明である。

これに対し新カリでは、ＬＬを徹底的なリスニング訓練にあてた。集中度の低下はテープとビデオの併用や活動内容の切り替えなどでできる限り対処することとし、スピード・リーディングを読解に入れた。外国語習得にはリスニング訓練が鍵という研究報告が言語教育研究者だけでなく、脳神経学の専門家からも出されており、そのうえ耳（身体）で覚える作業はむしろ疲れることでこつを覚えるからである。いわば「急がば回れ」の方針を取ったといえないこともない。また新カリでは、インターネットや電子メールの普及により作文能力がこれまで以上に重要になることを予想して、英作文を１科目増設して合計２科目としたが、リスニングと会話の能力は作文の基礎にもなるので、読解を増やす時間の余裕はなかった。

しかし、読解能力の低下は阻止しなければならない。すでに前年度から、共通教科書の選定なども含めて、読解力向上を促進する reading strategy の導入について検討を加えていたが、プレースメント・テストの結果は一刻の猶予もできない事態であることを示していた。そこで先生方にはテストの結果を提示し、共通教科書の選定は間に合わなかったが、スピード・リーディングと vocabulary building を強化して読解改善に留意していただきたいとお願いした。

本年度の結果をみると、３年生については残念ながら入学時のレベルまでに回復してはいないものの、上昇に転じている。統計的に有意な数値ではないかもしれないが、２年生は下降せずに伸びており、２学年が共通して上昇したことは重視すべきであろう。

実施年度別平均点

	リスニング			読　　解			総　得　点		
	95年	96年	97年	95年	96年	97年	95年	96年	97年
95年度入学者（３年生）	16.3	25.6	29.5	31.7	27.7	29.3	48.0	53.3	58.8
96年度入学者（２年生）		19.4	27.6		26.1	28.6		45.5	56.2
97年度入学者（１年生）			24.6			26.2			50.8

特に、入学時においては現３年生より総合得点の低かった現２年生が、読解能力の低下が食い止められたために総合点が大幅に伸び、現３年生の１年後の成績を上回ったことは注目に値する。

教師が学生の弱点を意識してそれぞれ指導方針を工夫すれば、それだけでも成果が上がることが、これで証明されたといえるのではないだろうか。実は、95年度にも読解改善の要望を先生方に出したのだが、裏づけとなる数字がまだなかった。それが、96年度のように明確に数値として出てくると、教師の受け止め方が明らかに異なってくる。プレースメント・テストの有効な使い方のひとつといえよう。

97年度からは、読解能力改善をただちに始めるために、1年生に reading strategy を導入し、そのための選定教科書を2冊用意し、学生のレベルと先生の指導方針に合わせて選択をするようにした。選定にあたっては非常勤の先生方にアンケートをとり、さらに他の英語科目担当の先生方にもこれを配布して共通理解をはかり、今後の授業の土台とする処置をとった。なお、日本語に頼らず手持ちの英語を最大限に利用する reading strategy の訓練は、ネイティヴの先生の方がやりやすいので、1年生の読解指導はいずれ全員ネイティヴの先生にし、日本人教師は2年次の精読に投入する方向で検討中である。

②英検パスの可能性

次に国際学部の目標となっている英検2級パスの観点から、プレースメント・テストの結果を分析してみた。英検では70点が合格ラインなので、70点以上取った者は2級パスの実力がある者、また60点代の者はその予備軍とみなすことができる。ちなみに、96年度に入学した2級保持者の入学時の成績をみると、70点台以上が68％、60点台が24％、50点台が8％、それ以下は0となっている。(95年度は入試の英検保持者特別枠がないため調査しなかった。)

したがって、50点台でも可能性はあるといえないことはないかもしれないが、取得時期の関係等で実力が落ちていることも考えられること、また英語検定2級の現行方式ではリスニング・テストでテープを1回のみ聞かせているのに対し、プレースメント・テストでは2回聞かせていることから、点数評価を厳しくとらえて50点台はここでは考慮していない。

英語検定2級合格ラインを越す者

	入学時			1年後			2年後		
	70点以上	60点台	合計	70点以上	60点台	合計	70点以上	60点台	合計
95年度入学者（3年生）	17	35	52	51	59	110	54	59	113
96年度入学者（2年生）	42	42	84	52	60	112			
97年度入学者（1年生）	32	60	92						

96年度の在校生プレースメント・テスト（現3年生の3回目と現2年生の2回目）は、スケジュールの都合上、他の必修科目と組み合わせることができなかったため両学年とも欠席者が3割程度あった。そのため上位の者の数が減ったり、逆に英語に意欲のない者が欠席して平均値が上がったかもしれない。いずれにせよ、国際学部の学生の学習態度の問題を示唆するものであり、データの信頼性を上げるために改善が必要である。しかし、リスニング・テストには放送設備の使える大教室を使用しなければならない制約があり、欠席者を減らす対策は必ずしも容易ではない。なお、クラス分けには前年度の成績を参考とした。

したがって、これらの数値をどの程度全体の指標ととらえるかには疑問の余地があるものの、

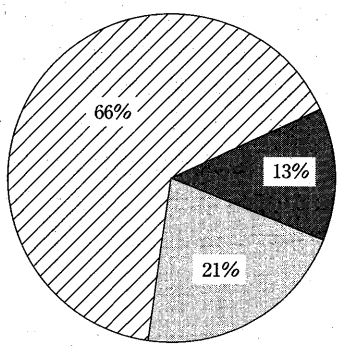
おおまかな傾向はとらえることができるであろう。たとえば、1年後の合計が2学年通じてほぼ等しい点が注目される。96年度入学者の方が入学時に英検2級の能力をもった者が大幅に多いので（96年度から英検資格所有者の特別枠が入試に設定された影響が大きい）、英検能力の観点のみからみれば、96年度入学者の方が進歩が少なかったといえる。だが平均値の伸びは95年度入学者の5.3に対し96年度入学者は10.7で、96年度入学者の方が進歩したという結果になる。2年後の結果がでているのは現3年生のみであるが、1年後と変化がなく、明らかに伸びが鈍化しており、何らかの対策を立てる必要を示唆している。本年度は3年次の選択必修に資格試験対策クラスを一部に導入しているので、その効果が出ることを期待している。

③個々の学生の進歩

次に考えなければならないのは、全体としての平均値は上がっているものの、一部の者の成績が大幅に伸びたために全体の数値を押し上げ、個人として伸びを示している者は逆に減少しているかもしれない可能性である。2年生はまだ1年経過しただけなので、2年間国際学部で英語教育を受けている3年生について、入学時の成績より上がった者、下がった者の数を検討してみた。2回目の成績は経過点とみなして省略し、入学時と3回目のプレースメント・テストの結果を比較し、5点以上成績の上がった者は「進歩した」とし、5点以上下がったものは「退歩した」とした。入学時の欠席者と3回目の欠席者は除外し、234名について資料を得た。

2年間の英語教育の効果

	進歩した者	変化のない者	退歩した者	合計
総数	155名	48名	31名	234名
%	66%	21%	13%	100%



この数字からも、全体として国際学部の英語教育は効果をあげているといえるであろう。しかし、約2割の変化のない者と、残念ながら成績の落ちている1割強の者、合わせて3割の学生をいかに向上させるが更なる課題である。なお英検試験の場合は、1点を境として合否が決まるので、5点差ではなく1点差でも変化があったと考えると、進歩した者は76%、退歩した者は24%となる。これは変化のない者48名が、1点を境にちょうど半々に分けられるからである。偶然とはいえ、おもしろい事実である。

また、この分析を行うプロセスで気づいたのは、入学時のテストに出席しなかった者は3回連続して欠席をするケースがほとんどで、英語の成績がふるわないだけでなく、休学や退学をする者が多いように思われることである。さらに詳しい分析をしなければ断定はできないが、新入生のオリエンテーション時に行うプレースメント・テストの欠席者については、特別なケアが必要とされる傾向がある、とはいえるであろう。

④学生への通知とＬＬ助手の役割

新カリ下のプレースメント・テストの実施当初から懸案となっていたのは、テストの成績を学生に通知するか否かの問題であった。学生は、自分の配属されたクラスのおおまかなレベルは推

測していると思われるが、成績が良くても悪くても、不必要な先入観は進歩の妨げになるので、毎年クラス分けの順序を変更し、推測しにくいように配慮している。成績を教えると、自分がどのクラスに配属されているかが推測しやすくなる可能性が強く、また成績の悪かった者への悪影響が懸念されたため、これまで結果は学生に知らせないできた。

通知に必要な事務的負担も問題で、これまで教員にも教務課職員にもその余裕がなかった。しかし、学生は成績を知りたがっており、問い合わせる者も少なくなかった。また3年生の2年間の追跡調査の結果をみると、20点以上上がった者が46名、30点以上上がった者が14名いる。特に30点以上の場合はその全員の第1回の成績が1名を除いて40点以下で、30点台から70点台になった者が3名、40点台から70点台になった者3名、40点台から80点台になった者1名と、下位の者ほど顕著な進歩を見せる傾向がある。上位の者はそれ以上あがりにくいので、当然の結果といえるが、この結果を示せば、下位の学生がやる気を起こすのではないだろうか。特に国際学部の場合は、英語が必要だと感じている者が大多数なので、この結果に勇気づけられると思われる。

後述するアンケート調査によれば、学生は留学や就職のために英語の資格取得の必要性を感じており、プレースメント・テストの成績は合否の目安となるので、資格試験に挑戦するきっかけとなると思われる。そこで本年度から、初年度にさかのぼってテスト結果を学生に通知することにした。これが可能になったのは、96年度からようやくＬＬに助手が配置されたからである。それまでは、ＬＬ機器の正確な使用法を知っている者が学内に1名もおらず、新任教師に使用法を教えるメーカーの派遣員すらマニュアル片手に指導するというありさまであった。

幸い有能な助手が配置され、プレースメント・テストはもちろん、アンケート集計や、テープやビデオの貸出しなど、語学教育に必要かつ望ましいさまざまな仕事をサポートしてくれている。国際学部の語学教育は、世界的な趨勢に対応するコンピュータによる授業が必要になってくるが、このためにも助手が果たす役割は大きい。ＬＬに限定せず、広く教育助手として充実・活用すべきであろう。

[今後の課題]

①プレースメント・テストの一層の活用

プレースメント・テストでは、すでに、どの受験方式によって入学してきたかの情報もインプットしている。どの方式の学生の入試成績が良いか、入学後の伸びはどうか等、今後さらに詳しい分析を行い、英語の入試方法の改善を行なう資料としたいと考えている。また本年度からはマーク・シートが変更され、英語の資格保持の有無、海外経験等についても記入するスペースができたため、これを調査するとともに、担当教員に個別指導の参考情報としてもらうことも考慮している。

新カリによるプレースメント・テストはすでに3回実施されたわけであるが、これは2年次までの英語教育の効果を測定するものである。国際学部では3年次にも必修英語科目が1つあり、その効果も測定する必要がある。プレースメント・テストは、当初クラス分け用に発足したという背景があったため、3回目の2年終了時以降の実施は考慮していなかった。しかし、3年終了時にも実施すれば、現状の3年分散型の英語科目の学年配置が妥当なのか、それとも2年集中型の方がより効果的なのかを推定する貴重な資料にもなり、今後のカリキュラム改善の方向性がより明確化するであろう。したがって、97年度後期には国際学部の1～3年の在学生全員に実施する予定である。

②学生へのサービス

新カリで新たに設定された3年次の選択必修外国語制度は、どの言語のクラスをどの程度準備すればよいのか等の裏づけないまま、カリキュラム改革が先行していた。そこで96年度の秋に2年生を対象としたアンケートを実施し、学生の選択希望を聞くとともに、国際学部の語学教育全般についての意見を聞いた。このアンケートはこれから毎年実施しなければならないが、圧倒的に多かったのは、英検、TOEFL、TOEIC等の資格をとりたい、会話ができるようになりたいというものであった。

この傾向は英語だけでなく、第2外国語においても、ネイティヴによる実用的な会話訓練が欲しいとの要望が非常に多かった。すでに中国語では中国人の先生による授業が実施されていたが、他の第2外国語ではそうなっていなかった。ほとんどの学生にとって第2外国語は初習外国語であるので、限られた時間で文法等の基礎を効果的に学習するにはむしろ日本人教師による授業の方がよい場合も多いのだが、ネイティヴの先生に接することもまた重要な経験であることは言うまでもない。本年度からはスペイン語でも実施を開始したが、日本人学生に外国語として教える訓練をきちんと受けた外国人教師を、他の外国語についても導入することが必要となってくるであろう。

選択外国語12クラスのうち4クラスは第2外国語に振り当てられたので、残りの8つの英語クラスについては、アンケートの結果を反映した設定を行った。3クラスはネイティヴによるオーラルの訓練で、内容はそれぞれドラマ、映画鑑賞、ビジネス英語を中心としている。残りの4クラスはさまざまな資格試験を受けるための準備コースとし、最後の1つは、3年次では語学としての講読コースがないため、そちらに振り向けた。

必修英語1科目はネイティヴによる英作文で、これはコンピュータ時代におけるライティングの重要性と、留学や大学院進学の希望者を考慮したものである。本年度から、電子メールをミシガン州立大学の学生と交換する特別授業を、希望者20名に実施している。これは、文教の学生は英語でミシガンの学生は日本語で交信するシステムをとっており、相互に学び合い教え合う真の国際交流を狙ったものである。技術上のさまざまな問題が出ることが予想されるが、すべての学生に海外交信をする機会を与えるために、今後アジアを中心とした諸大学との提携を図る予定である。

国際学部における英語教育改革はまだ始まったばかりで、これからしなければならないことが山積している。しかし、限られた授業時間と教員スタッフでは限界があるので、学部外の組織との連携も視野に入れる必要がある。例えば教育ライセンス・センターである。この組織のおかげで文教の学生は資格試験を受けやすくなり、また関係機関からの情報が入るので、受験者数や合格者数が分かるようになった。国際学部においては100名単位で英検試験に挑戦しており、2級合格者も毎回15名程度出ているほか、最新の例では一次試験合格者が2倍になっている。また英文専攻の者でもなかなか難しい準1級試験の合格者や、TOEICでも最高クラスの成績をおさめる者が出るなど、学生に非常に良い刺激を与えている。プレースメント・テストの結果の公表に踏み切った背景には、このような資格試験に対する学生の反応がある。これからは、各自に通知するだけでなく特に成績の優秀な者を発表し、スランプに陥りがちな上位者への励みとする処置も考慮している。

（国際学部教授）